様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　5 月　30 日現在

研究種目：若手研究（A）
研究期間：2007～2009
課題番号：19683005
研究課題名（和文）　不妊治療経験者の選択と岐路、その支援
—多様な親子関係を築く女性と子どもの語りから
研究課題名（英文）　The choices and a crossroads of women experienced infertility treatment, and the supports for them: From narratives of women and children build diverse relations between parents and their children

研究代表者
安田　裕子（YASUDA YUKO）
京都大学・大学院教育学研究科・研究員
研究者番号：20437180

研究成果の概要（和文）：不妊治療でも受胎しなかった女性の不妊治療をやめた後に及ぶ子どもをもつことにまつわる経験を、生涯発達心理学の観点を取り込み、不妊治療や養子縁組といった社会システムとの関連のなかで捉えた。そして、当事者の人生展望に沿った支援の在り方について検討した。

研究成果の概要（英文）：I grasped infertile women's experiences, who couldn't have had children with infertility treatment and had stopped it, from the view point of life-span developmental psychology. I analyzed the experiences with related to the social systems, infertility treatment and adoption. And I examined how to support the persons concerned along each prospect of their own lives.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2008 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総　計	6,900,000	2,070,000	8,970,000

研究分野：臨床心理学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：不妊、人生径路の多様性、ナラティヴ、非血縁の親子関係、支援、質的研究、養子縁組、発達臨床

１．研究開始当初の背景

(1) 不妊治療技術の高度化・先端化の功罪：日本では不妊治療は、1983 年に体外受精が、1992 年に顕微授精が成功し、不妊に悩む女性の希望の拠り所となっているが、治療に通いつめても子どもが授からない人も多い。他方、治療技術の進歩は、治療すれば子どもをもつことができるという認識を強め、当事者女性を治療に駆り立てている面がある。

(2) 病の経験のライフストーリーという観点の導入：1970 年代の医療人類学でのパラダイム転換をきっかけに、患者-医療従事者関係の枠組を越えて、社会的苦悩といった見方が拡がった。また、臨床的にはナラテ

ィヴ・アプローチを中心に、通常医療の場で周辺的に扱われている病の経験や慢性状態を理解しようとする方向性がある（Kleinman, 1996 他)。患者の語りに真剣に耳を傾ける姿勢こそが医療の基本であり（斎藤・岸本, 2003)、実際、病気などの喪失や不在の状態を経験した時、過去の人生の意味を問い返し、人生を再編し、新たに生き出すことが必要となる。病の経験は、人生の物語が生み出される典型的な場なのである（やまだ, 2000)。

２．研究の目的

(1) 不妊に悩み、治療経験を経て養子縁組を選択した女性の発達過程の検討

(2) 非血縁の親子関係を築く過程の検討

(3) 不妊治療過程における、治療終了後の生活を視野に入れた心理社会的支援の検討

３．研究の方法

(1) 当事者の意味づけを捉える理論的・方法論的基盤―ナラティヴ・アプローチとライフストーリー・インタビュー：ナラティヴ・アプローチでは物語モードによって世界を捉え、語り手と聴き手の相互行為の文脈で、経験の組織化、物語の語り方、多種の意味づけを重視する（Bruner, 1986)。ナラティヴ・アプローチを基盤とするライフストーリー・インタビューにより、出来事をどう組み込みいかなる感情や意味を付与しているかという心理プロセスを含む物語的真実に迫ることができる（やまだ・山田, 2006)。

(2) 人生径路の多様性・複線性を捉える方法論的枠組み―複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model: TEM）：等至性（Equifinality）の概念を発達的・文化的事象の心理学研究に組み込もうと考えた Valsiner（2001）の創案にもとづく。多様な径路を辿っていても、社会的・文化的な影響を受け時間経過のなかで、等しく到達しうる点（Equifinality Point：等至点）があるという考え方により提唱された（Valsiner & Sato, 2006)。

ナラティヴ・アプローチはデータを扱う理論的基盤であり、そして、ライフストーリー・インタビューはデータ収集の、TEM はデータの分析・思考・記述の方法論である。

４．研究成果

(1) **冊子の作成による知見のまとめと普及**：インタビューにより収集した不妊（治療）を経験した女性の語りの分析をもとに、当事者支援ツールならびに高校生・大学生・一般の人々を対象とした社会啓発・教育ツールとして、冊子『子どもをもつことができなかった夫婦の人生の選択―不妊治療をする、その次の選択』を作成した。その内容は、不妊に悩み、不妊治療に期待をかけながらも治療が不成功に終わるという衝撃（感情のジェットコースターと表現される)、子どもを産むことができないという女性としてのアイデンティティや自尊心の低下、妊娠した女性への羨望と嫉妬、人とは違ってしまったという孤独感、今後の人生が展望できないという将来への閉塞感などの幾多の感情の揺さぶりや喪失感情を経験し、その過程で治療技術の限界や身体的・年齢的限界を意識化したりいのちへの畏敬の念を抱くなかで、不妊治療で子どもをもつことに執着するばかりではない多様な生き方へと視野を広げ、不妊治療をやめて、非血縁の親子関係をむすんだり職業にエネルギーを費やすなど、自己像や今後の人生を再構築していった有り様を提示した。また、養子縁組をした子どもとの関わりのなかで、受け入れた当初の子どもの試し行動、養育の困難、子どもの出自に関する周囲への告知、ならびに子どもの発達段階に応じた子ども自身への告知の仕方、社会や社会的支援に関して望むこと、などについてまとめた。このように、長い時間軸を通した生涯発達の視点から、不妊女性の経験と選択を描き出した冊子を作成し、不妊治療実施施設や希望者に配布し、知見の普及に努めた。

(2) **時間経過に沿った不妊経験や選択の多様性の提示、心理社会的支援、および方法論の検討**：発達における喪失の意義という観点を導入し、成人期女性の生涯発達の有り様を提示した。喪失を経験すると、過去の人生の意味を問い返して再編し、新たに生き直す必要があるという（やまだ, 2000)。「結婚＝受胎」という社会のマスターナラティヴ（支配的言説）を越えて、「養子縁組で子どもを育てる」「夫婦 2 人で暮らす」という人生選択や家族を築く有り様を捉え、成人期女性の本来的な生涯発達の広がりを示した。その際、人生径路と選択肢の多様性を可視化し、選択が社会的に方向付けられていることを論じるとともに、「治療をする/しない」「養子縁組を試みる/試みない」「子どもをもつ/もたない」という選択が本質的に保障されることの重要性を指摘した。

具体的には次の3点にまとめられる。

① **不妊当事者の生涯発達を視野に入れた心理社会的支援の検討**：
不妊に悩んだ時点での選択肢の提示：不妊治療で受胎することに絶対的な価値づけがなされることなく、治療を始める前の段階で、不妊治療と養子縁組の両方の選択肢が、それぞれの可能性とリスクとともに心理教育的に示される必要がある。不妊当事者が自らの生活設計や人生展望に位置づけて、選択することができるようにする。
不妊治療中における喪失感情への対処、ならびに夫婦での感情共有のための支援：個人カウンセリングでは、治療の不成功による喪失、理想的な家族像の喪失、いのちをつなぐことができないという喪失に対処する必要がある。また、当事者グループでの感情や経験の共有は、自尊心の低下や孤独感・疎外感などの喪失感情の対処に役立つ。不妊特有の喪失に向き合うことは、治療でも受胎しないというマイナスの経験を乗り越え、治療をやめる選択を考える契機にもなると考えられる。また、夫婦間で喪失感情のずれを共有し合えるか否かは、治療中の夫婦間の支え合いにはもとより、不妊（治療）経験への意味づけや、治療後の夫婦関係の善し悪しにも影響する。
不妊治療中からその後に及ぶ、当事者の権利擁護：非配偶者間の不妊治療を選択する当事者がその事実を秘密にするよう強いられたり、生まれてくる子どもが出自を隠蔽されることなく、それぞれが自らの生を引き受けて人生を築いていくことができるように、権利を擁護する必要がある。
時空を超えた不妊経験の共有：直接的に支援を受けることのできない不妊当事者に対し、他者の経験を共有できるようモデル提示することにより、当事者が、精神的な安定を得たり、歩む方向性を選択する指針を得ることができる。

② **社会啓発と教育への提言**：子どもをもつことをめぐる選択と経験の多様性を広く社会に提示し、社会的弱者や社会的少数派への理解を促す必要がある。こうしたことは、思春期・青年期を対象としたジェンダー教育や性教育にも、活用することができる。

③ **質的研究法 複線径路・等至性モデル（TEM）の可能性の検討**：TEMは、見えにくい人生径路や選択肢を可視化しつつ、社会的・文化的な諸力の影響を受けた経験や選択、意思決定過程を捉えることができる質的研究の方法論である。TEMにより記述した人生径路モデルは、経験の語り手が自らの選択への意味づけを確認することのできる心理臨床的効用、今後同様の経験をするであろう人に向けた道標的効用、人間の発達や人生径路の多様性への理解を促すツールとしての教育的効用などがある。

(3) **国内外の学会など研究交流の場における発表と意見交換**：国内では、各年度に、日本心理学会、日本質的心理学会、日本発達心理学会、対人援助学会などに出席して研究発表を行い、心理学、社会学、医学などの近接学問領域の研究者や現場支援者と意見の交換をはかり、積極的に知見を聴取した。海外では、2008年度には、オーストリア・ウィーン大学との研究交流、国際発達心理学会（ドイツ・ヴェルツブルグ）、国際心理学会（ドイツ・ベルリン）に、そして2009年度には、イギリス・ロンドン大学で開催された研究発表・交流会、ヨーロッパ心理学会（ノルウェー・オスロ）に出席して研究発表を行い、国際的な場で知見や意見の交換ならびに研究交流を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 安田裕子・やまだようこ、不妊治療をやめる選択プロセスの語り―女性の生涯発達の観点から、パーソナリティ研究、査読有、16、2008、279-294
② 安田裕子・荒川歩・髙田沙織・木戸彩恵・サトウタツヤ、未婚の若年女性の中絶経験―現実的制約と関係性の中で変化する，多様な径路に着目して、質的心理学研究、査読有、7、2008、181-203
③ 安田裕子、非血縁の親子関係を築く選択と経験―不妊治療では子どもを産むことができなかった女性のナラティヴ、心理臨床学研究、査読有、25、2007、550-560
④ 安田裕子、精子・卵子・胚の提供による生殖補助医療で親子関係を築く人々への支援―子どもへの告知に焦点をあてて、家庭教育研究所紀要、査読有、29、2007、57-66

〔学会発表〕（計２６件）

① 滑田明暢・福田茉莉・木戸彩恵・中坪史典・安田裕子、インタビューにおける相互行為を探る―役割の変化が立ち現れる瞬間に着目して、日本質的心理学会第7回大会、2010年11月28日、茨城大学
② Yasuda, Y., The possibility of collaboration between the qualitative method TEM and the idea of the

Dialogical Self: Narratives of infertile women's choices, The 6th International Conference on the Dialogical Self, 3th October 2010, President Hotel, Athens, Greece

③ サトウタツヤ・日高友郎・福田茉莉・安田裕子・利島保・野口京子、医療・健康と心理学の新しい関係をめざして、日本心理学会第 74 回大会、2010 年 9 月 21 日、大阪大学

④ 安田裕子・やまだようこ、不妊治療でも受胎しなかった女性の人生選択のナラティヴ―その支援に向けて、日本心理学会第 74 回大会、2010 年 9 月 20 日、大阪大学

⑤ 宇都宮博・神谷哲司・東海林麗香・安田裕子・岡本祐子、結婚生活の継続のなかで配偶者との関係性はいかに育まれるか(1)―子どものいない若年夫婦を中心に、日本発達心理学会第 21 回大会、2010 年 3 月 27 日、神戸国際会議場

⑥ 山口智子・安田裕子・能智正博・川野健治・やまだようこ・森岡正芳、過酷な体験の語りの聴き手／研究者であること、日本発達心理学会第 21 回大会、2010 年 3 月 26 日、神戸国際会議場

⑦ サトウタツヤ・安田裕子・荒川歩・溝上慎一・Agnieszka L.Hermans- Konopka・白井利明・Hubert J.M.Hermans・森直久、「時間」と「空間」のなかで自己の変化を捉える、日本心理学会第 73 回大会、2009 年 8 月 27 日、立命館大学

⑧ 安田裕子・谷村ひとみ・香川秀太・森直久・松嶋秀明・川野健治、TEM による質的研究の可能性の拡大―TEM によってどのような地平が開けるか、日本心理学会第 73 回大会、2009 年 8 月 26 日、立命館大学

⑨ Yasuda, Y., Narrative analysis of adoptive parents regarding notification of birth history: application to infertility treatments involving donations, The 11th European Congress of Psychology, 8th July 2009, Radisson SAS Plaza Hotel, Oslo, Norway.

⑩ Yasuda, Y., Narratives of women who experienced infertility treatment: From the quest story for having children, LONDON PROJECT: The quest of narrative methodology for the medical and psychological support in multiple cultures, 2th July 2009, Tavistock Centre, London, UK.

⑪ 家島明彦・荘島幸子・安田裕子・川島大輔・能智正博、ナラティヴ・アプローチの意味を問い直す―研究者の暗黙のナラティヴ理解の明示化を通して、日本発達心理学会第 20 回大会、2009 年 3 月 25 日、日本女子大学

⑫ 森直久・安田裕子・木戸彩恵・Valsiner, J.・小島康次、TEM で始まる心理学研究、日本心理学会第 72 回大会、2008 年 9 月 19 日、北海道大学

⑬ Sato, T. , Valsiner, J. , Ma, Chuan , Takahashi, N. , Mahmoud, H. W. , Yasuda, Y., Scheithauer, H. , & Chaudhary, N., Time in Life: women's uncertainties regarding infertility treatment（Time, space and culture: Chronogenesis in human life course）, The 29th International Congress of Psychology, 25th July 2008, International Congress Centrum ICC Berlin. Berlin, Germany

⑭ Yasuda, Y., Why women discontinue infertility treatment: Understanding the meaning of their decision, The 20th International Society for the Study of Behavioral Development, 14th July 2008, Congress Centrum, Würzburg, Germany.

⑮ Yasuda, Y., Choices involved in the decision to stop infertility treatment: Understanding the process through narrative accounts and personal impacts, 2nd International Workshop on Multi Cultural Studies: Research Collaboration between the University of Vienna and Kyoto University, 10th July 2008, the University of Vienna

⑯ サトウタツヤ・松本佳久子・足立絵美・森直久・安田裕子、発達のプロセスとトランスフォーメーションを記述する試み―HSS と TEM という方法から TLMG という理論枠組みへ、日本発達心理学会第 19 回大会、2008 年 3 月 20 日、大阪国際会議場

⑰ やまだようこ・安田裕子・山口智子・田垣正晋・川島大輔、質的心理学におけるナラティヴ分析の方法、日本発達心理学会第 19 回大会、2008 年 3 月 19 日、大阪国際会議場

⑱ Yasuda, Y., Diversity of Women's Experiences in Coping with Infertility over Time, Kyoto University Global COE Program. International Workshop on Multi Cultural Studies: Research Collaboration between Kyoto University and the University of Vienna, 6th February 2008, Kyoto University

⑲ 松本光太郎・荒川歩・安田裕子・麻生武・松島恵介・大倉得史、研究行為における

「歴史」と「因果性」について考える、日本質的心理学会第 4 回大会、2007 年 9 月 29 日、奈良女子大学

⑳ 安田裕子・サトウタツヤ・森直久・Valsiner, J.・村上宣寛・菅原ますみ、文脈に埋め込まれた時間と共にある経験を捉える枠組み―HSS（歴史的構造化サンプリング）と TEM（複線径路・等至点モデル）、日本パーソナリティ心理学会第 16 回大会、2007 年 8 月 25 日、帯広畜産大学

㉑ サトウタツヤ・安田裕子、質的研究入門からシステムの記述へ、日本家族研究・家族療法学会第 24 回大会、2007 年 5 月 25 日、ぱるるプラザ京都

〔図書〕（計 9 件）

① 安田裕子、女性ライフサイクル研究所、生殖補助医療をめぐる 20 年と女性の選択―社会・関係性・自己決定（女性ライフサイクル研究第 20 号　女たちの 20 年―女性を取り巻く社会は変わったか）、2010、pp.78-85

② Sato, T. , Wakabayashi, K., Nameda, A., Yasuda, Y., & Watanabe, Y., Information Age Publishing, Understanding a person as a whole: Transcending the Anglo-American methodolatry and Continental-European holism through a look at dynamic emergence processes (Methodological thinking in psychology : 60 years gone astray?), 2010, pp.89-119

③ 安田裕子、ナカニシヤ出版、子どもに恵まれないこと（成人発達臨床心理学ハンドブック―個と関係性からライフサイクルを観る）、2010、pp.255-267

④ 安田裕子、誠信書房、不妊治療経験者の子どもを望む思いの変化プロセス―子どもをもつことができなかった女性の選択岐路から（TEM ではじめる質的研究―時間とプロセスを扱う研究をめざして）、2009、pp.17-32

⑤ 安田裕子、誠信書房、未婚の若年女性の中絶経験―その径路を TEM 図で描いてみる（TEM ではじめる質的研究―時間とプロセスを扱う研究をめざして）、2009、pp.57-74

⑥ 安田裕子、東信堂、不妊治療の場を越えるために―生活の場との境界を行き交って（＜境界＞の今を生きる―身体から世界空間へ・若手 15 人の視点）、2009、pp.35-37

⑦ 安田裕子・サトウタツヤ、新曜社、質的心理学の方法（フィールドワークの論文指導）、2007、pp. 224-236

⑧ Sato, T. , Yasuda, Y. , Kido, A. , Arakawa, A. , Mizoguchi, H. , & Valsiner, J., Cambridge University Press, Sampling reconsidered : Personal histories-in-the-making as cultural constructions(Cambridge Handbook of Sociocultural Psychology), 2007, pp.82-106

〔その他〕
ホームページ等
http://www.kcat.zaq.ne.jp/aaaxj504/

６．研究組織

(1)研究代表者
安田　裕子（YASUDA YUKO）
京都大学・大学院教育学研究科・研究員
研究者番号：20437180

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：